

水澤一廣会員の推進する「うらほろスタイル」を取材



水澤一廣会員（北海道浦幌町長）が実施している「うらほろスタイル」について取材しました。2007年から始まったこの取り組みは、総合学習の中で行われた中学生たちの提案を大人たちが実施するというもので、これですべての子どもの提案が実現されてきました。いま町のキャラクターになっている『うらは』と『ほろま』のコンビも中学生の提案でした。



2022年11月23日、NPO法人うらほろスタイルサポートの門馬孝敬理事長、本間悠資理事が対応くださいました。前述のように、以前は「子どもたちが提案して大人が実現」するパターン（浦幌活性化案発表会）でしたが、2021年、2022年は「中学生が実施してからそれを提案」というパターン（浦幌活性化プロジェクト）に変わったそうです。今年、浦幌産の牛乳で作られたプリンを地元ケーキ屋さん（お菓子の店ニシムラ）と作り、それが見事商品化されふるさと納税でのお礼の品となっているそうです。また、道の駅隣接のレストランでカフェも実施され、ブリトー、ミニパフェなどが提供されました。また、浦幌町内の最適なサイクリングコースを探すため、浦幌町内をあちこちママチャリでサイクリングしたグループもありました。

また、道の駅隣接のレストランでカフェも実施され、ブリトー、ミニパフェなどが提供されました。また、浦幌町内の最適なサイクリングコースを探すため、浦幌町内をあちこちママチャリでサイクリングしたグループもありました。

2010年3月に道立浦幌高校が閉校となり、浦幌の子どもたちは高校から他地区に通わざるを得なくなりました。地元に着愛を持ってもらおうという発想でこの「うらほろスタイル」が始まりました。いまや小学1年生時から中学3年生までの9年間に渡って地元への愛着の心をはぐくんでいます（小学5年生は町内の家に民泊します。）。いまや中学校を卒業した高校生たちが浦幌部を、それにならって中学生たちが中学生版浦幌部を立ち上げ、地域への貢献活動を担っています。特に、中学生版浦幌部は浦幌に住む動物や植物を紹介する絵本を今年作り上げました（絵本タイトル『ここはどこ？』）。

高校がなくなって衰退すると思われがちですが、その危機感を子どもたちも共有し、大人と子どもが協力し合って浦幌町は活性化が進められています。水澤会員が町政を担う浦幌町は子どもたちと大人の連携でますます元気になっていきます。

